子どもの健やかな成長を願い

生活リズム講演会に多数参集

第 631 号
発行人●豊丘村公民館
唐澤克己
編集人●長野県下伊那郡
豊丘村公民館
編集委員会
0265－35－9066
印刷所●龍共印刷株式会社

私たちの村
（9月1日現在 ※外国人を含む）

男	3，430人
女	3，540人
総人口	6，970人
世帯数	2，060戸

『劣化』防止に外遊び

―生活リズム講演会で清川先生提言

生活リズム講演会が、公民館学習会を兼ね、八月二十九日に保健センターで開催されました。NHK放送文化研究所専門委員の清川輝基先生が、「〝メディア漬け〟で壊れる子どもたち」と題して講演されました。先生は、「子どもが人間らしく生きていくには、メディア漬けは絶対に避け、家の外に出て豊かな自然の中で、他人と苦楽を共にする体験が大切」と、豊富な事例に基づいて提言されました。

古畑　菅沼麻里

清川輝基先生の「メディア漬け」で壊れる子どもたち」の講演をお聞きしました。スマホ、ｉｐｏｄ等爆発的に広がり、子どもたちが簡単に接触できる世の中になりました。

前回のお話でもあった様に脳に影響するのはもちろんですが、長時間接することで視力低下、筋力低下、コミュニケーション能力の低下がみられているそうです。このことを先生は「劣化」という表現をされていました。

また、授乳している母親の八割が授乳しながらスマホやゲームをやっているそうです。実は、私もその経験があり、赤ちゃんへの悪影響を聞いて青ざめ即座に止めた事を思い出しました。自然でない光と音、そして電磁波を至近距離であたえているのは人体実験みたいなもの、という先生の言葉が衝撃的でした。現在では親もメディア漬けになっているので、子どもの劣化につながっているのが現状です。

中高生でもネット依存の人が多くなっていると聞きますが、大切なのは人間がメディアに使われるのではなく、人間が判断をしてメディアを使うことだと痛感しました。

清川先生の熱意が伝わり

豊丘村学校
ＰＴＡ会長
木下智明

「〝メディア漬け〟で壊れる子どもたち」と題して、清川輝基先生の講演を聞いて「これは日本がだめになる」と強く感じました。

講演のキーワードは『劣化』。親である私たちは毎日テレビを見ない日はありません。子どもたちはゲームや携帯電話を見ない日はありません。なんと、日本人が世界で一番電子映像を見ている時間が多いそうです。

電子映像（テレビ・ゲーム・スマホ・ｉｐｏｄ等）が安心な物であるという証明は、全世界でまだ一回も報告されていない。安心な物と報告されていないものを「便利だから」「みんな持っているから」という安易な理由で使用してきたせいで『劣化』が起きていると先生は熱弁されました。

もうすでに、日本は『劣化』が始まって、かなり進んでいる。視力が低い子ども、我慢できない高校生、人とのコミュニケーションが取れない大人。これらはすべて電子映像に依存して育ったからで、日本人の子どもは絶滅危惧種だそうです。

これ以上、日本人を劣化させないために何をしたらよいのか？　先生は『外遊び』を勧めます。外遊びは三次元の世界で、友だちと言葉を交わし、自然とふれあい、頭を使わないと、虫捕りもできません。

子どもは面白いこと、楽しい方へ必ず向かいます。それを制限するのは大人の責任です。親だけでなく、学校、地域と大人がみんなで子どもをメディア漬けから守り、外遊びができる環境を作っていくことが、我が子の未来の安定につながる、と真剣に考えさせられる講演会でした。

北信越で二種目優勝

―昼神ゆかりさん、中体連水泳で大活躍

豊丘中の昼神ゆかりさんが、この夏開催された中学校体育連盟の水泳大会で、大活躍しました。背泳の百メートルと二百メートルで、北信越大会を制し、全国大会にも出場しました。反省点を次の飛躍に結びつけるひたむきさに感服します。

豊丘中二年
昼神　ゆかり

今年の中体連を振り返ってみると、色々な経験をしたシーズンでした。県大会では、二百メートルの背泳ぎで、目標だった全国大会の標準記録を突破することができたのでとってもうれしかったです。北信越では県大会の時よりタイムは落ちてしまいましたが、百メートル、二百メートル両方の種目で優勝することができました。また、今回の北信越大会では、他の県の人とも仲良くなることができたので良かったです。そして静岡県で行われた全国大会では、新しい経験をすることができました。今までの大会とは全く雰囲気が違ってとても緊張してしまいました。レースでは、初めての全国大会ということもあってあせってしまい、思うように泳ぐことができませんでした。結果は、県大会よりもおそくなってしまい悔いが残る大会となりました。全国大会を通して、反省点がみつかり、来年は決勝進出を目標にこれからも頑張っていきたいと思います。最後に南信大会から全国大会まで応援に来てくれたお父さん、お母さんには本当に感謝しています。また、応援してくれた先生、友達、そして豊丘村の方々本当にありがとうございました。

一段丘

豊丘村に来てから早五ヶ月が過ぎました。

実際何しているの？と言われると、まだ「活動をしている」とは言い難い状況です。地域の事を知っていないし、地域の食文化を知りたいと思って色々聞いて回っているだけで手一杯。でも、地域の方々との話は常に興味深い事が多く楽しいです。

出向先の職場は「だいち」になりますが、職場での仕事は楽しいです。村の方々に活動を理解されつつあるとは感じていますが、まだまだこれからだと思っています。

今、これから大きくなって欲しいと思っているのは、「だいち」のそばで毎週日曜日開催している「ふれあい大市」です。以前は、もう少し出品者の方々がいると何っていましたが、現在では毎週来て売っていただけるのはほんの数人。寂しい限りです。何かできないものかと、思案しては練り直しの繰り返しです（苦笑）。

ここ最近、ひとりで視察に行く事も増えました。今後もそうしていこうと思っています。視察先のリアルを間近で見られるような気がしています。なかなかお話する機会がないので、少しでも話ができればとも思っています。

最後に、私を見かけたら気軽にお声かけください。少しでも、皆様と触れ合えたらと思っています。

（齊藤弘昭）

この館報は再生紙100% シュールコート を使用しています。

「炊出し」加え、訓練も本番

―9月1日、林原木門地区の地震防災訓練

林原木門地区委員長
前野　政一

東海地震を凌ぐ南海トラフ地震の危険性が言われている。「まさか自分の生きているうちには……」と楽観していられない今日この頃である。

林原木門地区では、昨年つくった地区地震防災計画に基づいて様々な訓練を複合した防災訓練を九月一日に行なった。

防災無線から流れる『訓練地震発生』の一報を受けて、まず地区役員が指定避難所の慈恵園とコミュニティセンターの緊急点検を実施。ただちに地区内五か所の防災無線を起動して、住民は隣組毎に指定の避難所に避難するよう放送した。隣組長は実際に避難者の氏名を把握するようにした。

これに先立ち両避難所には日赤団員が参集し、二五十食を超える「炊出し」を手際良く行なった（写真）。

大方の避難が完了した頃からセンターでは「消防訓練」が始まった。実際に火災警報装置を鳴らし、「一一九番」に通報。全員が再びセンターの屋外に避難すると、自衛消防隊が「放水訓練」を披露した。

一方の避難所の慈恵園からは、住民の一人が負傷したとの一報で緊急出動班が出動し、担架で救出。並行して同園体育館では女性消防団員を講師にＡＥＤ講習会が行なわれた。

最後には、炊出しのおにぎりを味わって訓練は無事終了した。

連携も実にスムーズに

成果が花と開く日々

―通学合宿無事終了

小学校四年生の通学合宿も、九月六日をもって終了しました。宿舎となって生徒の指導を担当された慈恵園の園長先生に、この合宿の感想を寄せていただきました。

慈恵園長
貝原　豪

通学合宿では、子ども達もご家庭の皆様も本当にお疲れ様でした。

たまたま社会教育委員長と慈恵園長を仰せつかり、通学合宿に関わらせて頂きましたので、その様子をお知らせ致します。後日、成果と反省は教育委員会がされますので、私の方からは感想に留めたいと思います。

まず、子ども達は本当に明るく楽しく元気に生活していました。この全体の流れの中で、子ども同士のトラブルや助け合い、親切や悲しみもありましたが、どのグループも無事合宿を終了できました。

生活の営みを四日間一緒に行ないましたので、各ご家庭の生活の姿をそのまま出していました。話し方、食べ方、風呂の入り方、眠り方、心の使い方などみんな違う生活を持ち寄っての共同生活で、子どもは何を感じ取ったのでしょう。

構成メンバーによって大きく変わります。

朝四時頃から起きだしてサッカーや遊具で遊び、学校で疲れてしまったり、深夜の零時過ぎまでお喋り。女の子達がリーダーとなり取り仕切るかと思えば、なかなかとけ込めず最後まで二、三人のグループでバラバラに過ごしたり。一方初日の下校時から北と南の子ども達が仲良く最後まで楽しい雰囲気だったりと本当に様々なグループの人間模様でした。

子ども達からは「お母さんがうるさくてしょうがない…。慈恵園から学校に通えないの？」とか、「慈恵園は『監獄』だってお母さんが言ってたよ」などの言葉が聞かれました。

最終宿泊日は、ユニットで園の子ども達と交流もして頂き、感謝しています。また、夏休みの学習にも園を四年生が使ってくれました。地域と園の子ども達にとって、この企画に感謝し成果が花と開く日がやってくる事を信じています。

慈恵園の子どもと一緒に宿題をやっています

食育をわかりやすくアピール

―9月8日、学校給食フェア

優良賞も受賞

学校給食共同調理場
吉沢美紀

去る九月八日、アピタ飯田店において第八回学校給食フェアが開催されました。今年度は「のぞいてみよう学校給食～発見！ランチスコープ～」というテーマで、多くの方に学校給食について知っていただこうということで内容を検討しました。

学校給食紹介コーナーでは実際に給食室で使用している白衣や調理器具、実物の給食を展示しました。減塩コーナーでは塩分濃度0.8%のみそ汁（ダシをとり、野菜をたっぷり入れて作ったみそ汁）の試飲をしてもらい、家庭のみそ汁との違いを体験してもらいました。

かみかみコーナーでは、ゼリーとするめを食べてもらい、噛む回数の比較をしてもらったり、口を開けたままの時と歯をくいしばった時の握力の違いを実測して、噛むことの大切さを感じてもらいました。豆つかみゲームでは正しい箸の持ち方について、野菜の「どの部分を食べているのでしょうクイズ」では身近な野菜は植物のどの部分なのか考えてもらいました。どのコーナーも大盛況で、今年度も昨年度以上のお客さまに来場していただきました。

また、給食フェアとは別件ですが、今年度本調理場は長野県学校給食優良賞をいただきました。

給食フェアと併せて、これからも食育の推進に力を注いでいきたいと思います。

食の大切さが幼い子どもたちにも

史学会コーナー

郷土の遺産　シリーズ　(37)

木門井水と水神様

木門
唐澤克己

木門井水の源は、「漆沢の堤（つつみ）」と呼ばれる溜池である。この溜池は、村道佐原線の佐原集落の入り口にある。昭和三十六年の、いわゆる「三六災」で危うく決壊しそうになった。その教訓を活かして今まで何度か補修を重ねてきた。農業用の溜池としては、村内最大級である。

この溜池から発した水は、西北に下り、やがて「ませぐち」と呼ばれる取水口に達する。その距離は一キロメートル足らずである。取水口までの道程は、上流は沢地の南脇を通り、下流は山間の谷底を下る。これらはいずれも自然の水路である。それ故に、「ませぐち」までは、井水というより、むしろ川と呼ぶのが適切であろう。この川は、「伊雑皇社奥宮」のある山の北側に位置する。

「ませぐち」は木門井水の取水口である。ここに小さな水溜め場を設け、必要に応じ木門井水に水を取り込む。余水は、そのまま谷間の川を流れ下る。

「ませぐち」から取り入れた水は、山の中腹を通り、木門集落に届く。「ませぐち」から木門集落入口までは七百メートル余になる。

言うまでもなく、木門井水は人工の水路である。多分明治時代に、先人が水田用に築いたものである。地域住民が生き延びるためとはいえ、機械力もない当時、山腹への水路設置は非常な難事業であり、決死の決断であったに違いない。

現在の木門井水は、山腹にU字溝を繋いでできている。大雨の時など決壊する危険もあり、地域では、井水係を中心に維持管理には細心の注意を払っている。また、木門井水は、農業用水としてのみでなく、地域の防火用貯水池にも利用している。そのため維持管理の作業には、農地耕作者のみでなく、必要に応じ地域の全戸が従事している。定期作業は、通常、三月、六月、十二月の年三回である。

木門井水が通る山の尾根に、「諏訪明神」と記された石製の水神様が祀られていた。「昭和御大典記念」と付記されているので、昭和天皇陛下が即位された時に、住民が、この地域の水利の安泰を願い、建立したものである。当時は、井水路と集落を見渡せる絶好の位置に設置したものと思われるが、今では尾根に大木が茂り、地域住民の寄りも悪い。そこで、木門地域では意を決し、昨年ついに、その水神様に集落が一望できる集会所の北側に下りてきていただいた。建立以来、実に八十六年ぶりである。こうして今、水神様は、集落を隅々まで見渡し、地域住民を庇護してくれている。

「ませぐち」ー右から落ちてきた水が、左の取水口に

敬老の日特集

楽しみながら適度に

食べる面からの長寿の秘訣

九月には国民の祝日「敬老の日」があります。高齢者の方々がますますお元気でご活躍されますよう、役場の栄養士さんに、食べる面から長寿の秘訣をアドバイスしていただきました。年配の方々のみでなく、若い方々にも、大変参考になると思います。

楽しく！おいしく！

住民課保健衛生係
仁科朋子

厚生労働省より、平成二十二年の平均寿命が発表されました。長野県の男性は前回に引き続き二位（八十・八八歳）、女性は、九七五年以来一位を維持してきた沖縄県を抑えて一位（八十七・一八歳）になり、八十歳九十歳、それ以上に長生きできる時代となりました。そこで、おいしく食べて長生きする生活を送るにはどんなところに気をつけたら良いか、長寿長野県の特徴も合わせてみていきたいと思います。

長野県は全国で唯一、野菜の摂取量が男女共に三百五十グラム以上あり、目標値を上回っています。しかし塩分は男性十二・五グラム、女性十・七グラムと、基準である男性九グラム未満、女性七・五グラム未満という値より多くなっています。また、豊丘村においては特に果樹栽培が盛んなため、果物からとる糖分にも気をつけなければなりません。りんご、なしなら半分、みかんなら二個が一日の目安量です。他の食品は牛乳は二百グラム、卵は一個、魚は二分の一切れの五十グラム、肉なら薄切り約二枚分の五十グラム、豆腐なら約四分の一丁の百十グラム、ご飯は茶碗一杯が一日に食べてほしい目安量になります。

これに加えて食べ方にもひと工夫が必要になります。高齢期になると、入れ歯を入れることにより、噛む力が弱くなったり、噛み合わせが悪くなったり、他にも飲み込みが悪くなったり、むせやすくなることがあります。そのような場合には食べやすい大きさに切ったり、汁物等飲みにくいときはとろみをつけると食べやすく、おいしく食事がいただけます。また、家族や友人と会話を楽しみながらの食事も、食事の楽しみを何倍にもしてくれます。食べる楽しみを忘れず、食べることを通じて、毎日生き生きと過ごしていきましょう。

豊丘村の年齢層別人口
〈平成25年９月１日現在〉

年齢層	男	女	合計
0－4歳	173	120	293
5－9歳	177	153	330
10－14歳	180	172	352
15－19歳	173	187	360
20－24歳	167	147	314
25－29歳	171	130	301
30－34歳	188	173	361
35－39歳	187	199	386
40－44歳	200	212	412
45－49歳	219	185	404
50－54歳	203	218	421
55－59歳	234	238	472
60－64歳	291	257	548
65－69歳	188	215	403
70－74歳	178	213	391
75－79歳	191	223	414
80－84歳	157	206	363
85－89歳	114	170	284
90－94歳	33	91	124
95－99歳	6	30	36
100－104歳		1	1
（合　計）	3430	3540	6970

こちら資料館 135

消防用腕用ポンプの歴史

来年完成予定の村の「まちづくり交流センター」への道路建設の為、資料館の収蔵庫が移転する事になりました。今回は、この中に保存されていて、普段は展示されない品物を紹介します。その中で一番大きなのがこの腕用ポンプです。

江戸時代の消火道具といえば天水桶と手桶です。今でも防災訓練の折には、バケツリレーで水を運ぶ練習をしています。

水鉄砲や竜吐水のように、少し離れた所へ水を飛ばす事ができる道具も使われました。しかしこれ等の道具はほんの数メートル、気安め程度しか水が出ませんでした。

明治になって登場したのが外国産のこのポンプです。ポンプの上、前後に横棒を取り付け、それぞれ三人がかりでピストンを上下動させます。一分間三〇〇ℓ高さ二十五ｍまで水が届いたそうです。写真のポンプは国産で飯田の店から昭和五年に購入した物です。

この頃に比べれば今の消防車は格段の進歩をしています。しかし、火災から私たちを守ってくれるのは人の力です。常日頃から防火・防災活動に取り組んでおられる消防団員の方々に改めて感謝あるのみです。

（資料館主任　岡庭易彦）

昔の消防ポンプです

プレーの度に盛り上がる

24時間ソフトボール、午前4時で雨天コールド

今年の二十四時間ソフトボール大会は、八月二十四日に始まりましたが、二十五日になると雨が降りだし、午前四時頃、雨天コールドゲームとなりました。しかし、試合を実施できたチームは、それぞれ内容のある素晴らしいゲームを展開し、充実した時を過ごしたようです。若い参加者に、感想をお聞きしました。

南市場
金田紋佳

八月二十四日、二十五日に行なわれた二十四時間ソフトボール大会に参加させていただきました。私は以前、少年野球クラブやバドミントンクラブで三回ほど、この大会に参加しましたが、今回は母の知り合いの方に誘っていただき参加しました。また、ファンプレー賞もいただき、とても楽しませていただきました。勝ち負けを気にせず、「一つ一つのプレーでみんなが盛り上がる！」ところが、本当に良い大会だなと感じました。

試合後にいただいた豚汁も、とてもおいしかったです。

今回、参加チームがあまり多くありませんでしたが、来年ぜひ多くの方に参加してもらい、この大会がもっと盛り上がれば良いな！と思います。

来年は、チームを作って、この二十四時間ソフトにまた参加したいと思います。とても楽しかったです。

深夜に撮影すれば闇のナイター

村教育委員会蔵

「東雲（しののめ）」も展示

――飯田市美術博物館特別展

十月五日より飯田市美術博物館で開催される特別展に、公民館大ホールに掲示されている亀割隆画伯筆の「東雲」も展示されます。画伯と作品について、解説していただきました。

飯田市美術博物館
小島　淳

亀割隆は明治三十四年に下條村に生まれました。彼は日本画家を志して上京し、大和絵の大家・鳥谷龍岬のもとで修業を積み、華麗で静寂な印象をたたえた花鳥画・風景画を描きました。

本図「東雲」は、昭和二十三年の第三回日展に出品された作品です。戦前の亀割は花鳥画を主題にして制作を続けていましたが、戦後になると新たな展開を求めて風景画に挑みます。本図はその早い段階での制作で、静寂で郷愁に満ちた風景を装飾的な筆法によって描きました。そして二年後には同じ画風を用いて「夕月」を描き、日展で特選を獲得するのです。

飯田市美術博物館では、十月五日から「伊那谷の日本画―春草没後の求道者たち―」と題した特別展を開催します。本展では亀割隆のほか、高森の棚田泰生、松尾の仲村進、上久堅の福与悦夫、そして豊丘の片桐白登を取り上げ、「東雲」はじめ彼らが手がけた名品を紹介します。

※作品データ
亀割隆「東雲」
昭和二十二年（一九四七）
第三回日展出品
紙本著色　一曲一隻
二〇四・〇×一七六・五cm
豊丘村教育委員会蔵

亀割画伯の作品「東雲」

高々と上がりました

――9月7日、のろし上げリレー

九月七日の午前九時十五分に、林原運動公園で、豊丘村の「のろし」が、高々と上がりました。

村の一層の発展を祈って

猛暑の中で熱戦技戦激戦

――8月15日に分館対抗球技大会

分館対抗球技大会が八月十五日に猛暑の中で行なわれ、どの試合も熱戦に次ぐ熱戦で、実に見応えがありました。選手の方々は、外の熱に負けないほどの熱を内からも発散したようです。

大会結果

《軟式野球》
1位 第二分館
2位 第三分館
3位 第五分館
第七分館

《ソフトボール》
1位 第四分館
2位 第二分館
3位 第三分館
第一分館B

《ソフトバレーボール》
1位 第一分館A
2位 第二分館
3位 第七分館

迫力の軟式野球

ベテランの味、ソフトボール

ソフトバレーボール、闘志余って

上手になれば益々やる気が

レベルの高い好試合、夜間ソフトバレーボール大会

リーグ戦で切磋琢磨

七月に開始した夜間ソフトバレーボール大会は、八月七日に女性の部が終了し、混合の部も九月七日に幕を閉じました。各チームともに技術が一段と向上し、レベルの高い好試合が展開されました。和気あいあいのムードの中にも、勝利への執念がみなぎり、迫力満点のプレーの連続でした。

大会結果

《女性の部》
1位 河野フレンドA
2位 ほほえみ
3位 河野フレンドB
4位 河野フレンドC
5位 すうぱあどらいず
6位 HeySey セブン
7位 ミルキー

《混合の部》
1位 ちーむクマシロ
2位 ヒップ
3位 バストA
4位 ウエスト
5位 天 恵
6位 バストB
7位 カッターズ
8位 グッド!!
9位 豊丘村役場
10位 ハミングバード

ひとつのボールに8名の全神経が

～シリーズ～ No.119 豊丘の自然

チュウガタコガネグモ（コガネグモ科）

「二〇二〇年、東京五輪開催」決定。七年先のこと。私は七十八歳。「セミのぬけがら集め」そこまでつづけられるかどうか。

さて、今日の主役は…。めずらしいクモを見付けたので紹介する。ところが、名前が分からない。専門家に聞くか、図鑑で調べるしかない。後者を選択。科も分からないのだから、分厚いページを最初からめくっていくしかない。そんな過程を踏んで、ようやく、「チュウガタコガネグモ」に、たどりついた。

話はもどるが、「今年もセミは少なかった。」そんな印象。岩田さんの梨畑は二二九匹、本島さんの梨畑は一七五匹。ともに過去最低。ところが、市沢さんの梅畑は一四七五匹で、過去三番目に多いのだ。（山田 拓）

お詫びと訂正

館報第六三〇号（八月号）の四面俳句欄、磯部セツ子さんの句に、下記のような誤りがありました。お詫びし訂正いたします。

記

（誤）松蟬の友渡りゆく空の色
（正）**松蟬の声・渡りゆく空の色**

川柳

〈豊丘川柳クラブ豊柳会〉

▼課題「多」 互選
お多福の笑顔が招く平和な世　西元 峯子
多すぎる患者の中に我も居る　久保ひろし
聞かぬふり聞こえぬふりも多くなり　市沢 照子
深い皺苦労多くは語らない　林 桃子

▼課題「等」 互選
平等に育てたはずがこの違い　宇井惠美子
均等に子らに分けてた母の指　原 美風
宝クジ等に入れと夢を買い　宮島 昭三
庶民にはこれで上等ジャージ着る　吉川 燎
修羅場では頼りにならぬ優等生　桃沢 健介

▼自由吟 桃沢健介選
子供らの声無き部屋のゲーム音　宮下 小町
流星に願いこめるやピンコロリ　泉 久子
公平に一雨欲しい空仰ぐ　安田 喜子
手口学べとナチスを語る傲慢さ　喜寿 喜多
九条をしみじみ想う終戦忌　福沢 勝美
軸吟…天災を越え活気づく果樹の里

俳句 短歌

ミシン糸通らぬ焦り梅雨深し　中山 寿子
ふなばたやかたみに曳かれ鮎吐く鵜　北原 昭子
轟きて対岸照らす川施餓鬼　磯部セツ子
子等を待ち外灯点す夏の宵　田中 静
百合の香に満されてをり峡の路　三島 保子
鮎つりの渡る足場を案じやる　三島 里子
紺絣汗のしみいて藍匂ふ　木下 眞水
流灯に別れを惜しみ盆終る　和地 睦夫

〈公民館短歌会〉

三人の孫に消されていた音は帰りし翌朝聞くせみの声　北沢 秀子
いたずらな天使も居らん好日を心して歩む道しるべ見つ　毛涯百合子
ノスタルジアかくれんぼした路地想う百日紅の木 漆喰のかべ　大倉 知江
朝毎に冷気を浴びていきいきと仕事の意欲みなぎりてくる　松下 泰見
命懸け国護らんと志願せるわれ戦わず国敗れたり　中島 一彦
山藤が見えるは山が荒れてるの新聞記事にわれはうなづく　壬生 千春
熱中症かからないかと甲子園の球児をわれは裸で見てる　富永 博道

〈八 日 会〉

照りつける猛暑の中を子燕は親を追いつつ餌をもらえり　織田大原
緑なす田面は穂孕み色さえて風に揺れおり暑き日盛り　河原 梨花
リュウマチを病みいる妹さすりつつ疲れし眼に朝陽がまぶし　松島 八重
灼熱の続ける日々に水分を取りつつ大阪の友を思えり　紅 梅